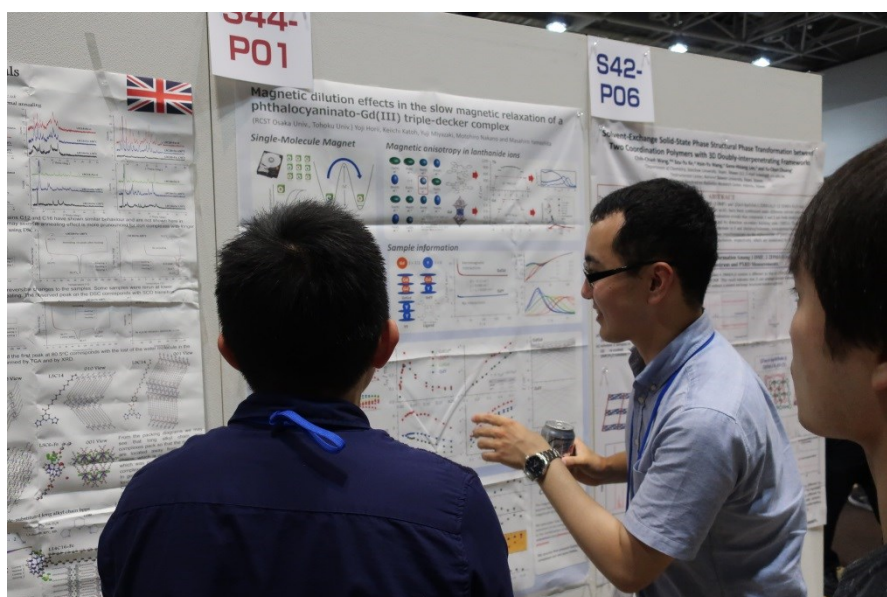


錯体化学会第 68 回討論会・ 第 43 回錯体化学国際会議(ICC2018)報告

2018 年 7 月 28 日から 8 月 4 日の 8 日間にかけて、仙台で同時開催された錯体化学会第 68 回討論会および第 43 回錯体化学国際会議(ICC2018)に参加しました。私の出身研究室である東北大学錯体化学研究室の山下正廣先生が Chair となり、世界中から参加者を募ったため、60 もの同時セッションと 2500 名もの参加者による巨大な学会となりました。また、錯体化学研究室の学生・スタッフは、本会議のために特別に作成した青い T シャツを身にまとい、会議運営に尽力していました。私は初日の朝に仙台入りしましたが、大阪から仙台へ移動すると、仙台の涼しさに驚きました。7 月 28 日から 30 日の錯体化学会第 68 回討論会では堀井が参加し、Gd(III) 錯体の遅い磁化緩和過程について発表を行いました。国内学会ではありますが、博士課程学生以上の場合には英語による発表が義務となっています。また、ICC2018 へ参加した場合は錯体化学討論会への参加が無料となることから、日本人以外の研究者も参加し、質疑応答に応じる場面が見受けられました。錯体化学は合成から物性まで広い領域をカバーしていますが、今回の会議で錯体の触媒活性や配位高分子に関する研究が多いことを実感しました。懇親会では、アカデミアへ進んだ同期と久ぶりに再会し、互いの近況を報告し合いました。

7 月 30 日の夕方から ICC2018 のオープニングセレモニーが始まり、酸化チタンの光触媒反応で著名な藤嶋昭先生の特別講義“TiO₂ Photocatalysis to Contribute Comfortable Atmosphere”が行われました。光触媒反応発見の経緯からこれまでの研究成果、そして今後の研究の計画までを、力強い英語で講演されました。当センターからは、中澤センター長が招待講演、坪准教授が口頭講演、私と修士 2 年の鐘ヶ江さんがポスター発表を行いました。ポスター発表会場は広く、多数の企業出展もありました。特に X 線回折装置を販売している Rigaku は、最新の単結晶 X 線回折装置を出展し、参加者が持参したサンプルを会場で測定するデモンストレーションを行っていました。多数の同時セッションがありましたが、私は分子磁性、分子機械、ポリオキシメタレートなど、様々なセッションに参加することができました。各セッションの合間には Plenary Lecture があり、日本からは IGZO や鉄系超伝導体で著名な細野秀雄先生が講演されました。また、グラスゴー大学の Lee Cronin 先生は、機械学習を用いたポリオキシメタレートの効率的な結晶化について発表しており、合成分野にも AI の導入が進むであろうことを実感しました。最終日には、2016 年にノーベル化学賞を受賞された Jean-Pierre Sauvage 先生の特別講義があり、興奮が冷めやらぬ中、会議が終わりました。学会期間中、仙台市内の観光も行いました。仙台市博物館ではインカ文明に関する特別展示を、宮城県立美術館ではディズニーアニメに関する特別展示を見てきました。インカ文明の装飾品や土器は、一目見てそれがインカのものであるという独創性があり、ディズニーアニメからはキャラクターの動きや背景の奥行きに対する徹底したこだわりが感じられました。

(堀井洋司)



Dr. Horii and audiences in the poster presentation.